地域のひろば

“安心と安全の福祉のまちづくりを”

府社協 地域福祉部
TEL.06(6762)9473 ／ FAX.06(6762)9487

市民が楽しく学べるイベント

枚方市 第2回 よどがわ防災まつり

2月17日、市立総合福祉会館（ラポールひらかた）で、よどがわ防災まつりが開催され、市民や関係機関約600人が参加しました。

この取り組みは、枚方市社会福祉協議会（以下、市社協）と認定NPO法人日本災害救援ボランティアネットワークの共催により、企業、行政、大学、労働組合等の関係機関に呼びかけて開催。多様な団体が協働し、災害に関して市民と一緒に考える機会としています。

2年目となる今年度は、「体験しながら学べる」をテーマに、日頃の防災に関する取り組みや地震車、クイズラリーなど、たくさんの体験・実演ブースがありました。スタンプラリー形式でブースをめぐるなど、子どもから高齢者まで幅広い参加者が楽しく学べる企画となっていました。

特に、ハイゼックス（米炊き袋）でカレーライスを作る炊き出し体験は、試食ができることもあり、好評で行列ができるほど。

また、体験コーナーの一つとして災害ボランティアセンター（以下、災害VC）運営シミュレーションを実施。まつりの参加者も災害ボランティアとして登録の受付から活動報告まで一連の流れを体験しました。

運営スタッフには近隣の市町村社協職員も参加し、社協間の連携と災害意識の向上を図ることにもつながっています。

市社協地域福祉課長の染林薫さんは、「災害VCや市社協の認知度がまだまだ低いことから、今後も、このまつりを通して、一人でも多くの方にご理解いただけるよう周知・啓発をしていきたい」と今後の抱負を話しました。

このように多くの関係機関が連携して行うこの取り組みは、災害時に備えた日頃からの「顔の見える関係」につながり、互いの経験を生かすことができる貴重な機会となっています。

大学生のボランティアが、子どもたちに新聞紙のスリッパづくりを指導

災害VC運営シミュレーションでは、約150人のボランティア登録を受付けました。

藤井寺市 多職種連携による災害支援の方法を考える

1月27日、「藤井寺市医療・ケアマネネットワーク連絡会」（以下、いけ！ネット）が、広く市内の福祉・医療の専門職や民生委員・児童委員に参加を呼びかけて交流会を開催しました。

当日は約100人が参加し、いけ！ネット内に設置する5つのチーム（認知症対応、多職種連携促進、啓発、課題分析、災害対応）から取り組みを発表。

中でも災害対応チームは、専門職が知っておくべきこととして「防災・減災・発災時対応マニュアル」の最新版を配付するとともに、災害時の口腔ケアにも生かせる「健口体操（お口の体操）」を参加者全員で行いました。

続く、認定NPO法人ゆめ風基金の長崎圭子さんによる「東日本大震災・熊本地震に学ぶ災害弱者の防災」と題した講演では、避難所生活や車中泊による災害関連死の実例を紹介。

「せっかく助かった命を、障がいを理由に失わせたくない」と、誰も排除されない避難所運営の大切さを訴えました。

その後、多職種混合のグループをつくり、ゆめ風基金オリジナルの「HUG※」を実施。学校を避難所に見立て、車イスを利用する高齢者や盲導犬ユーザー、発達障がい児等、さまざまな配慮を必要とする人を想定し、通路や受付の場所、居住スペースをどこに配置するか等の課題に対し、自由にアイデアを出しながら話し合いました。

会場内を電動車イスで移動しながら講演を行う長崎圭子さん

参加者からは、「これまで、障がい児の生活課題を考える機会がなかったので、新たな気づきが得られ勉強になった」、「災害対策が大事なのは分かっているが、何から手を付けたらいいか行き詰っていた。今回をきっかけに、地域や職場でこれから行うべきことが見えた」等の感想が寄せられました。

最後に長崎さんは、「防災は日々の積み重ね。専門職の皆さんの支援がないと、命が絶たれかねない。自らつながることができない人がいることを念頭に置きながら、これからも取り組んでいただきたい」と思いを語りました。

避難者のニーズに合わせ、どの人をどこへ避難させるか議論が白熱

※HUGは、静岡県が開発した避難所運営を疑似体験するゲームで、H（hinanzyo避難所）、U（une運営）、G（gameゲーム）の頭文字を取って名付けられました。

平成29年度

府介護者（家族）の会連絡会 全体活動交流会

～介護体験を分かち合い、悩みや知識を共有～

平成29年度大阪府介護者（家族）の会連絡会全体活動交流会が、2月16日に阿倍野市民学習センターで開催されました。

第1部では府連絡会の坂口義弘会長のコーディネートで、「看取り会員による介護体験」と題して2人の介護体験者によるパネルディスカッションがありました。

摂津市老人介護者（家族）の会の増本笑子会長は母親の介護体験について、また大阪狭山市介護者（家族）の会『たまゆら』会員の谷口順子さんは娘と共に夫を介護した体験について報告し、それぞれの介護体験に、会場全体が聞き入りました。

増本笑子さん

谷口順子さん

「生きていてほしいという思いを抱く反面、早く楽になってほしいとも思った」という葛藤や「延命治療を行うか否か、どちらが本人にとって、また介護者にとって幸せなのかよく考えることが必要」といった話があり、参加者からは「延命治療については今後考えさせられる課題だと思った」「看取りの介護体験は自分と重なる部分が多々あり、あらためて感激した」などの声がありました。

第2部のグループ別交流会は、分科会形式で開催。第1分科会では、今年4月に改正される介護保険制度についての意見交換を行いました。制度が具体的にどう変わるのかが分かりづらいことや、良いサービスがあっても制度の情報が把握しづらいため、上手く利用できない、といった課題があがりました。これについて、制度をわかりやすくまとめた資料や、インターネットに留まらず制度を知るさまざまな手段が欲しいなどの意見がありました。

第2分科会では、いくつかのテーマをもとに参加者間の介護体験の共有を行い、次のような意見がありました。

看取り後の喪失感について

- 「ああすればよかった」という後悔の思いを「これでよかったのかも」と気持ちを切り替えることが大切。
- 喪失感は必ずある。客観的に見て100％の介護でも、介護者自身が満足した介護はなかなかできない。

介護のコツ

- 趣味をつくるなど、自分を大切にしないと介護はできない。
- 介護は人によってさまざまいろいろな人の話を聞き、自分に合った介護のコツを見つける。

延命治療について

- 「生きているだけでいい」という人もいる反面、「延命をしてまで生きてほしくない」と考える介護者もいる。命のあり方は人それぞれ。
- 延命治療を行うかどうかは、元気なうちに家族内でしっかり話し合った方が良い。

❖❖❖❖❖❖❖

市町を超えた介護者同士の交流会から、介護を経験した人にしか分からない悩みや介護の知識を共有・発信する場として、介護者（家族）の会の必要性を再認識する機会となりました。

交流会の様子

生活困窮者自立支援事業実践交流会

生活困窮者自立支援事業が本格実施されて3年が経過します。この間、支援を受けた方の多くが就労や増収につながるなど、着実な成果が報告されています。

府社協では、各市町村の取り組みを共有し、今後のさらなる連携と支援体制の充実を目的に、3月16日、府内市町村社協・行政関係職員を対象に実践交流会を開催しました。

はじめに、大阪府福祉部地域福祉推進室副主査の上田真一さんから、生活困窮者自立支援制度の見直しの方向性について基調報告がありました。

上田真一さん

我が事・丸ごと地域共生社会の実現を見据えた包括的な相談支援の強化や、アウトリーチ等による生活困窮者の早期発見の重要性、そしてこの事業の委託元である自治体が、委託先の市町村社協へ積極的に関わる必要性についてふれ、自治体の責務を強調しました。

次に交野市社協地域福祉・在宅福祉係主任の中島麻也子さんから、地域や行政・施設・ハローワーク等多機関との連携による就労準備支援事業の取り組みや、各就労支援機関との情報交換会などについて報告。

中島麻也子さん

情報交換会では、各機関が就労支援において適切に連携するための相互理解をひとつの目的に、課題共有や意見交換が行われています。続いて、府社協生活支援部（はーと・ほっと相談室）部長の真田政稔から、地域共生社会の実現に向け社協に求められる役割について話題提供を行いました。

後半は、各市町村社協における当事業の実施状況や、社協として取り組む包括的な支援、新たな仕組みづくりについてグループ協議を行いました。主に生活保護担当課との連携の課題や、就労支援事業における地域貢献委員会等多様な機関とのさらなる連携強化の必要性があげられました。

府社協と市町村社協は、今後も当事業の受託の有無にかかわらず、多機関と連携した生活困窮者支援への取り組みを通し地域共生社会の実現をめざします。

情報交換の様子